

示某生 十二支詩

聚遠閣主人

首鼠惡兩端。牛角嫌觸藩。進爲深山虎。狡兔不足言。退爲大澤龍。草蛇亦奚論。意馬不脫羈。尙羊遊藝園。心猿不解索。鷄鳴窮學源。寧作喪家狗。勿作糞中豚。

雨中登花陵

遙上花陵樹。皆鳴千山風。雨壓孤城。淒然憶起徠翁句。亦是當年叱咤聲。

春日閑居

秋月胤繼

鶯、囀、飛、花、靜、犬、眠、過、客、疎、一、犂、微、雨、後、遠、屋、摘、春、蔬、

稼堂先生曰 閑趣可掬

同

茅舍依桑柘。綠深芳草春。孤、村、人、語、絕、檐、外、鳥、聲、頻、

春夜小酌

春月輝光淡。花間酒一卮。良霄千金價。香散入吟思。

花下步月

一刻千金值。梨、花、月、似、煙、清、光、隨、步、步、滿、地、影、鮮、妍、

稼堂先生曰 五絕貴淡筆四首皆佳

和易水先生韻書懷以贈

愛日居主人

狂奔不復傲時流。功業唯期傳萬秋。逆境蹈來如順境。悠悠自適作天遊。

春日漫遊

一望花明草愈青。淡煙靄々午風薰。曳筇郊外去。何地遮莫閑遊養性靈。

觀藤花

山内烟園

路入江村曲々斜。悠然曳杖問田家。紫藤一架春光殿。三月下旬初着花。

稼堂先生曰 淡々着筆而味自足、

四月九日友人步月

一雙木屐一杖筇。乘月吟歸步不慵。清光照路明似晝。青松影裏踏蒼龍。

稼堂先生曰 結句冷雋非夷所思、

批評

一奇漢あり、名を署して信天翁といふ、自ら稱す太平洋中の人也。頃者郵便に托して左の「篇」を寄せぬ、吾儕其何人たるやを知らず
に依りて植木附近の人たるを知るのみ。今其熱心を嘉して特に之を掲ぐ。編輯委員記

修學旅行日誌中の記事に就きて

信天翁

現今主として使用する攻撃水雷には、魚形水雷の他に外装水雷なるものあり。(他はなほ種々あれども、今日一般に用ゐらるゝは右の二種とす、千代田艦が清艦揚威を轟沈するに用ゐたるは、即ち外装水雷なり)。砲煩の進歩せる今日に在ては、其使用定て困難なるべきも、其の成功の確實なるは、魚雷の上にあり。清佛戦争の時、佛の水雷艇清の二艦を轟破せるが如き、實に此外装法によるものなり、故に今日に至るも、なほ其の信用を減することなし。

防禦水雷には「マイン」を用ふとあり、「マイン」とは布設水雷の謂なり、大別して永久防禦水雷、艦用